

研修報告書「写真コレクションによる展覧会づくり」

(「20世紀の写真芸術 学生がつくる大阪新美術館建設準備室・enocoのコレクション」展)

関戸 覚

はじめに

2017年7月2日から12月17日にかけて、大阪府立江之子島文化芸術創造センターにて行われたインターンシップ「写真コレクションによる展覧会づくり」に参加した。

このインターンシップでは、11月22日から12月16日まで一般に公開される展覧会に向けた諸準備から撤去作業までの流れ、また期間中に3日間行われたワークショップ「ピンホールカメラでとってみよう！」の運営、指導を経験することができ、美術展示に関する要点だけでなく、子どもや一般の方に芸術を知ってもらう活動の難しさといった様々なことを学ぶことができた。

今回の報告書では、その具体的な流れや各セクションで学んだことや反省点、今後に向けた振り返りについて以下に述べる。

(1) 展覧会作りについて

展覧会づくりでは、まず、章ごとに担当者が割り振られ、それぞれが担当する章の展示計画を立てていった。

7月2日に初の顔合わせ・自己紹介があり、7月29日までに担当する章の展示計画を中間報告としてまとめるという課題が出された。私の担当する第一章は、20世紀に関西で興ったアマチュア写真倶楽部、浪華写真倶楽部と丹平写真倶楽部に所属していた写真家の作品の展示をすることになり、大阪新美術館建設準備室もしくは大阪府20世紀コレクションに所蔵されている中から、作品を選ぶことになった。

また、展示室は第一章から第四章までが、展示室1という6つの区画に分かれた展示スペースを使用し、そのうち第一章は6つの区画の内、2つの区画を占有する配分の大きい章であり、展示可能な作品数も比較的多い章であった。

7月2日の顔合わせではまず、実際の展示室を確認し、後日もう一人の同じ担当者である小西伯宗氏と打ち合わせを行い、中間発表に向けて計画を立てていくことにした。



←展示室見学の様子

展示計画ではまず、膨大に所蔵されている作品を20～30点に絞り、どのような順番でどの作品を展示するか、ということを中心に置き考えていった。

その結果、各作家の作品を年代順に展示していくことで、浪華写真倶楽部、丹平写真倶楽部がどのように歩んでいったのかを来場者に感じてもらえることを目指すという方針に決まった。作品を選択するにあたって、私自身は作家ごとに一番個性が表れている作品を選ぶことで、その作家が写真を通して表現したいことを展示できるのではないかと考えた。打ち合わせの際には、お互いに選んできた作品を見せ合い、一致する作品は展示する方向性で考え、意見が分かれた場合は、どの点が良いかを話し合っただけで進めていった。このような打ち合わせを経て、展示計画の概要が完成し、中間報告に臨むこととなった。

しかし、中間報告後に学芸員の方から「学生の視点が入った作品という面も大事だが、この人はこの作品が有名、ということも重要視すべき」という指摘を受け、再度展示作品を練り直すこととなった。とはいえ、二人で考えていくのにはそもそも資料が少なく限界があったため、別日に江之子島文化芸術創造センターに行き、学芸員の方に相談することにした。相談では、作家について知識が足りていなかった部分の補足をしていただき、改めてどの作品がよいかを全員で考えた。これによって「クラブ石罅」や「装い」などの代表的な作品を踏まえながらも、「漫画のある堤防」「吹雪く夜」などの普段は取り上げられないが個人的に芸術写真として興味深く感じた作品をピックアップし、「こんな作品もあったのか」という感想を抱いてもらいたい、という考えのもと計画をたてることができた。

また、展示室でのレイアウトや動線の計画なども、選んだ作品をもとに、戦前に盛んであった芸術写真の流れを前半部分で展示し、後半部分は戦後に新たな展開を見せる流れを見せるという方向性で完成し、あとは章解説パネルの内容、その他の用語解説パネルの内容を考えるのみとなった。

しかし、今回のインターンにおける最も反省すべき点として、このパネルの内容に関しては、小西氏に一任する形となってしまった。章解説パネルについては、日本の芸術写真の夜明けを踏まえ、そこで導入された芸術技法、さらには活躍した写真家などを盛り込む必要があったため、私は小西氏が一旦完成させた内容を確認することで、そのパネル原稿執筆に参加するという形をとっていたのだが、結果として小西氏が調べてきたこと以上のことを知ることができず、その内容が適切なのかを判断するという役目を果たすことができなかった。

解説パネルの内容もまとめ、インターンは残すところ前日準備と展示撤去作業のみとなった。その間にあったピンホールカメラワークショップについては後述する。

11月21日の前日準備は朝9時から開始し、私たちのやることは、美術品取扱業務を専門とするカトーレックの作業員の方が展示作業を行うにあたって適切な指示を出したり、レイアウト通りに展示されるかどうかを確認したりすることだった。



↑ 展示作業の様子



展示作業では、ワイヤーを使用し、専用の工具を使って作品を展示していった。展示された作品は、ワイヤーの張りの強さ、傾きが無いかどうか、が入念にチェックした。

展示作品の固定が終わると、次は照明作業だ。照明作業では、一つの展示物にあたる照度をおおよそ 80~90 ルクスという明るさに調整しなければならない。この照度は作品保護の観点から設定されたものだが、ほかにも展示物に光が反射しないことや、明るすぎたり暗すぎたりすることが、じっくりと見るうえでは障壁になることが、実際に間違った照度で見えてみることで感じ取れた。ここでは、インターン生が照度を測り、作業員の方に指示を出すという作業となり、照度調整の難しさに非常に時間をかける形となった。



照度調整の様子

照度調整が終わり、章解説やキャプションを設置したところで、前日準備は終了した。翌日から展覧会が始まり、12月16日に終了した。その翌日の展示撤去作業は作品を丁寧に運ぶ作業を中心に行い、作品の状態が悪くなっていないかなどを確認した。また、展示室をもとに戻さなくてはいけないため、掃除や備品の後片付けを行い、午前中に終了した。

以上をふまえ、今回の展覧会づくりに関する反省を述べていく。今回の展覧会づくりでは、芸術作品を展示するときには、展示内容についてしっかりと考察し、動線やレイアウトの計画を立て、さまざまな意見を取り入れた修正を反映させ、ようやく実現することができるという難しさを学ぶことができた。一方で、今回テーマであった写真芸術への積極的な学びが十分でなかった。そうであるのに、展示がうまくいったのは、学芸員や同じ章を担当した小

西氏の尽力に他ならない。

今後の展望として、今回の展覧会づくりでの反省を生かし、今後のインターンや就職活動において、積極的に学ぶということを重視していきたいと感じた。

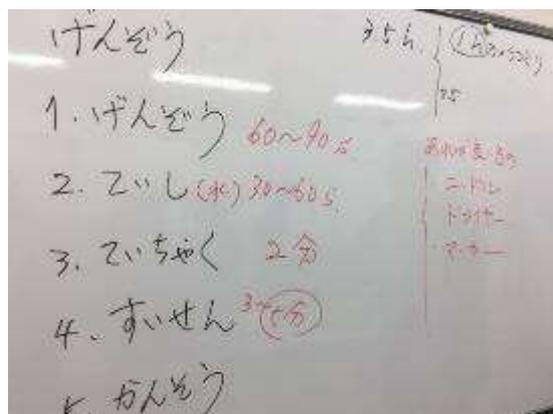
(2) ピンホールカメラワークショップについて

展覧会が開催されている間、11月25日、11月26日、12月10日に「ピンホールカメラでとってみよう！」という関連イベントが行われ、展覧会づくりと同時並行に準備が行われた。

まず、インターン生である我々がピンホールカメラの使い方を知る必要があるため、11月12日に大阪芸術大学から吉川直哉先生を講師にお招きして事前レクチャーを受けた。3日間開催されるワークショップのうち、2日間は児童が参加者のため、子どもが楽しめるようなワークショップにしようと思っただけでなく、アルミにあけるピンホールの大きさや、箱に入る光の遮断など、難しいことが多く、自分ですらうまく撮影することは容易ではなかった。そのため、準備は念入りに行い、グループでしっかりとワークショップを成功させるための役割分担は、話し合いと、1回目などでできた反省点をふまえ、万全の態勢で臨むようにこころがけた。



事前レクチャーの様子



私は、12月10日のワークショップ最終日を担当し、他に2人のインターン生のスタッフと、学芸員の方がアシスタントとしてついていただける形となった。係は、グループリーダー、暗室係、補助係の3つに分かれ、補助係には事前レクチャーに来られなかったインターン生を配置することで、円滑な進行を維持しようと試みた。

当日は昼から準備を行い、午後1時にワークショップを開始した。子供を連れた保護者が続々と訪れ、今回のワークショップを通して子どもたちが楽しんでくれることを期待していることがうかがえた。はじめに、リーダーである瀬崎氏が案内、内容説明を行い、ピンホールカメラ本体の作成がはじまった。ここでは手順にしたがって、子どもたちに作業してもらおうのだが、やはり全体に指示をとばしても積極的に動いてくれる子は少なく、個別で

対応していくことで進めていった。私は最初、この状況に緊張してしまい、何をすればいいかよくわかっていない子を前に、立ちつくすしかなかった。しかし、同じ視点にたってあげることで、どのようなアドバイスをすれば動いてくれるか、楽しんでもくれるかということを経々理解できるようになり、最終的には子どもたちと仲良くカメラ制作を行うことができた。そして、ある程度完成した子が現れると、暗室係であった私は暗室に移動し準備を行った。ここでは、少量でも光が印画紙に当たってしまうと現像ができなくなってしまうため、ドアを途中で開けたり電気をつけたりしてはいけない、という注意点が多い中で、指示をとばす必要があるため、その場にいる子をしっかりとまとめあげることが求められた。しかし、最初は思うようにまとめることができず、補助の方がいつのまにかまとめる立場になっているという状況ができてしまった。このままではいけないと思い、積極的に前に出ることで場をコントロールすることが大切だということを、失敗から学ぶことができた。その後、撮影は順調に進み、無事 16 時半過ぎに終了することができた。子供たちが楽しむことができたという点と、理想目標としていた 3 回の撮影をすることができたという点では、このワークショップは成功に終わったと言える。

しかし、反省点はあった。やはり、10 人の児童を相手するとなると、平等に指導することは非常に難しいことがわかった。また、天候や光の加減で、上手く撮影が出来ず、現像時に像が浮かび上がらない参加者が出てきてしまった場合の対処や、その後のケアなどが難しいと感じた。

このワークショップを通して得られたことは、主に、子どもに芸術に触れてもらうことの、楽しい面と、難しい面があることだ。この経験を生かし、今後子どもに芸術を教える機会があった時に、より楽しんでもらえる工夫をしていきたいと感じた。

(3) 研修全体を通した振り返り

今回のインターンを通して、芸術に関連した事業の総合的な部分を学べたのではないかと思う。展覧会づくりでは、芸術に対する積極的な学びの大切さ、展示計画の動線やレイアウトを熟考する必要性、展示作業技術における作品の取り扱いなどの、学芸員をめざす上で参考となる経験を学ぶことができ、ワークショップでは、教える立場として事前にしておくべき準備、当日の進行の段取り、子どもとのコミュニケーションの大切さや、芸術を楽しんでもらうために工夫すべきことを学ぶことができた。

今回のインターン先で学んだことは、自分が進路としてめざす道とは、少し違ったものであることを確認することができた。しかし、それと同時に、このような仕事に関わる人もいるのだという、興味の範囲を広げることに繋がった。今後はこのインターンをふまえ、物事に対する積極的な姿勢と、状況をうまく読み、良い方向に好転させていけるような人物像を目指していきたいと感じた。